

## 日本近世窯業史(ガラス工業)口語版

(株)機能性ガラス研究所 藤田 卓・編修



### 第十回

#### (3) 其他諸地方

東京、大阪を除くと愛知、京都、横濱、福島、福岡、佐賀、長崎等の数地方を見る必要がある。これら各地方の製品は洋灯用油壺及び火舎、その他水呑器、壺類もしくは比較的容易な工程で製造できる食器類であり、製品の大部分は何れも産地近くで消費されるのが一般的である。この中で顕著な産地として名古屋が挙げられ、特殊事情が寄与している所に福岡、北海道がある。福岡は遠賀郡戸畑町字牧山に旭硝子(株)があり、門司市外大里に合資会社大里硝子製造所があることによる。北海道については大日本麦酒(株)札幌製壺の存在が大である。

#### ① 名古屋地方

名古屋は東京、大阪・京都の中間に位置し、水陸運輸の便が良く、人口も増加方向にある。商工業が発展する中でガラス工業も進化している。東京、大阪ほどではないにしても日用諸種の器物ガラスと共に輸出向け製品も生産している。名古屋硝子製造組合員として十八名が登録されている。次の斯業者を列举する。

- \* 石塚岩三郎 東区西二葉町
- \* 渡邊兼吉 西春日井郡杉村字杉
- \* 松本和三郎 東区東二葉町
- \* 山内治郎吉 東区東二葉町
- \* 加藤常次郎 東区撞木町
- \* 安田銀次郎 東区撞木町
- \* 木村彌太郎 東区撞木町
- \* 斎藤音次郎 東区平田町
- \* 加藤半十郎 愛知郡千種町字松軒
- \* 曾我作次郎 愛知郡千種町字豊前

- \* 林 圓右衛門 愛知郡千種町字豊前
- \* 箕浦保高 愛知郡千種町字豊前
- \* 伊東駒吉 愛知郡千種町字車田
- \* 柴田鍵次郎 中区東陽町
- \* 若杉金次郎 中区東陽町
- \* 松東製壘所 中区松島町
- \* 共圓製壘所 中区南久屋町
- \* 深見米蔵 東区黒門前町

名古屋で最初にガラス製造工業が起こったのは明治 8～9 年頃であるが、谷半十郎、八神幸助、松本新平、廣田吉五郎等の工場は少々遅れてからである。明治 20 年には美濃国土田より石塚岩三郎の子である文左衛門が工場を名古屋に移し同業者も 10 数軒となった。文左衛門は明治 3～4 年頃より共栓の薬壘を製造し、傍ら火舎、吸玉等を製造していた。しかし、名古屋でガラス製造工業が起こった頃に開業したものは何れも洋灯用油壘及び火舎類の製造を主とした。玩具類は美濃の石塚岩三郎の徒弟である平五郎が製造したのが初めであった。後に八神幸助の工場は加藤松次郎、木村彌太郎等が継承し、文左衛門の工場は子の岩三郎が継承した。そのような状況であるが、名古屋硝子製造同業組合は規模的に限定的であった。販路は、東は静岡・横浜、西は京都に及び、北は若狭・越前・越中・能登に達す。輸出は明治 32 年頃より始まり、石塚岩三郎の製造する壘類をその兄、元三郎によりインド向けとした。その他に火舎類の輸出を試みるものがいたが価格的に折り合わずストップした。

原材料珪砂は、何れも東春日井郡の幡山及び赤津産を用いた。名古屋地域のガラス製造業者の特色としては、製造材料の購入方法にある。即ち、珪砂及び石灰は各工場の随意購入に任せているが、その他の諸用材料である薬品・坩堝耐火煉瓦類は全て組合に於いてこれらを購入し、各工場に分配している。坩堝は大阪で製造されたものを主として使用している。耐火煉瓦は現地及び大阪、備前三石製を使用する。

## ② 九州地方

各種工業が九州、殊に福岡県等に於いて盛んに発展し、本邦工業会の中心が大阪より九州北海岸に移ってゆくという見方が根強く出ていた。その中で、ガラス工業がどのような状況であったのか見ておく。

福岡市には小川鐵磨、町田豊吉、中原太三郎、中原助松、中原孫助の数工場あり。小川鐵磨は天保年間に斯業した小川某の孫であり、日本での最古の工場の一つである。また同縣鞍手郡直方町に金光利太郎あり。明治17年頃に久留米市に森某の工場あり。他地方のガラス業者は福岡対岸の西戸崎の白砂及び對馬産の珪酸質細土を原料として使用するものが多くいた。

佐賀縣には佐賀郡神野村多布施に精煉合名会社あり。萬延年間に時の藩主鍋島閑叟公が設立された精煉方に附属するガラス工場の後身のものであり、藤山種廣、中島宣等もこの工場に従事していた。種廣が欧州から帰国した後に工部省硝子製作所において傳習生を募集し、この工場が鍋島家内庫処々属の下に経営され、青木熊吉、岡部才太郎等が応募した。明治27年に青木熊吉が継承し精煉合資会社と称した。

長崎市のガラス製造業は再興が期待される土地柄であったが、明治11年に小曾根正樹が工場を設け弟子を養成して石炭を燃料として舷灯用紅色硝子、洋灯用火舎、食器等を製造し、明治12年には品川硝子製作所で従事していた職工を雇い入れ研究開発にも注力した。明治13年には上海、香港へ火舎を輸出できるレベルに至った。このようなことから縣からの補助を得たものの明治18年に病没するとともに廃業となったが、西村勝三、伊藤契信と並ぶ先駆者として評価されている。なお小曾根の工場では岩根常助、小出兼吉等が職長として勤務し、藤山種廣も修行していた。その後、明治22年に長崎製氷株式会社が設立されたが、社長鶴田和市の方針により硝子製造部を作り、酒壺、葉壺、牛乳壺の製造を行ない、ロシアのシベリア、朝鮮半島といったところに輸出したこともあったが、その後縮小し、佐世保に黒岩甚六が工場を作り、炭鋤用品を製造するといった形態となった。

鹿児島藩が経営していた硝子工場は市来廣貫之が継承し、明治5年の九州巡幸時に縣令大山綱良は同社製造の菓子皿を献上し、その後宮内省より蓋物3組の製造を命ぜられた。しかしその後、廃業し、明治38年創立の大河平隆橘の工場が残るのみとなった。

九州の硝子業界は、このような経緯で進むものの、大正2年に福岡縣遠賀郡戸畑町字牧山に旭硝子株式会社分工場の設立によって大きく状況が変わった。即ち、北海道、神奈川、愛知等を凌駕して、大阪、東京、兵庫と対峙して日本の主要な産地になったのである。この部分は「(4)板硝子製造業」で詳解する。

合資会社大里硝子製造所は同じく大正2年に稲葉権蔵の名義で福岡縣門司市外の大里に工場創設工事に着手した。同年に資本金2萬5千圓の合資組織とし先ず付近にある帝国麦酒株式会社醸造サクラビール用壘の製造を開始し、大正3年に六萬圓に増資すると共に工場規模を二倍とし、シーメンス式リゼネラチイブ窯2基にて付近の彦島(海上一里)から珪砂及び砂岩、恒見の石灰、英国の曹達灰等を用いて麦酒壘及びサイダー壘等を製造し、食器類製造も手掛ける。役員は中島徳次郎、中島繁造、貫田兵太郎、稲葉権蔵(代表社員)等で、技術者に上村孝平、今泉興一がいた。250人ほどの職工を使って電力で熔解、加工していた。その中で、製鉄所で発生する鑛滓/スラグのような材料もガラスの製造に活用するといった試みもあった。これらは煉瓦、セメントといった材料の製造に活用されていたものであるが、ガラス材料への用途開拓も試みるという動きであった。要するに、福岡縣北岸は石炭及び各種原材料の需給に便宜が多く、製品の海外輸出に関しては他の地域に比べて優位性を持っていた。この時代になってくると海外市場に重点を置く中で、ガラスも対象となる大きな産業であると、この地域で考えられていたのである。

### ③ 他の各地方

他の各地方のガラス工場で出色のものとして、横濱の横濱硝子製造株式会社、札幌の大日本麦酒株式会社札幌工場製壘部、山口縣三田尻の柏木幸助の驗温器製造工場等がある。

横濱市には横濱硝子製造株式会社の他に富山、土井、鹽瀬、初瀬、福田等、7~8戸の個人経営に係る工場が存在するが、何れも規模が小さく、共口小壘及び洋灯用火舎等を主製品としていた。横濱硝子製造株式会社は明治31年に山田新太郎等が設立に係り、資本金を三萬圓とした。その後、明治34年に資本金を四萬圓に増資すると共に工場を高島町から根岸に移転した。松村清吉を専務取締役平野久保を技師とし、半瓦斯式槽窯5基のうち3基を常用し、麦酒壘15,000本/日程度を生産する。これがメインの生産品となった。

京都市は明治43年に大原政盛、石村庄太郎、一井庄造、中井辰次郎、松澤福之助、檜新之助、中江閑次、日出幸清吉、澤田藤助、米澤覚野助等の製造販売者が商工組合を創立するが規模的には小さい。明治6年頃に松本磯吉という製造者があり、工部省品川硝子製作所において技術を蓄積したが、当時無鉛硝子の製法に苦心し実用に耐える製品を得た。それにより、京都府舎密局から高評価を受け、明治10年に天覧を添い製造した紅色硝子を皇室に献納している。この地域では懐中時計のカバーガラス用のガラスとして高品質な製品を製造している。荻野清助、高島藤三郎、二名の製品が高品質で明治23年(1890)開催の第三回内国博覧会に出展し、それ以降、好評を博している。

山口県においては、品川硝子会社が厚狭郡小野田に分工場を設立し板硝子等製造する計画があったが、これが頓挫することになった。そのような中で特筆すべきは医療留點験温器の製作者である佐波郡防府三田尻の柏木幸助の存在である。幸助は九代に渡り菓舗を業とし、燐寸(マッチ)の製造を行っていた。明治13年に自室の寒暖計を見た時、その原理について考えたことから、験温器製造を思いついた。同年に小窯を築き、信楽焼五斤入茶壺を坩堝に代用して実地研究した。明治16年に成功に至った。その後30年ほど製造販売を進めた結果、アメリカのサンフランシスコ、ハワイ、南洋諸島、ロシアのシベリア、中国等に輸出するようになった。また幸助は発明の才能があり、明治32年頃に醤油改醸法を発明し特許取得した。次いで醤油醗酵素研究中に一種のチアスターゼを発見し、柏木デアスターゼと命名して販売する中で特許取得もしている。

東北方面では福島縣磐城平町に磐城硝子株式会社がある。ここは明治39年に平耐火煉瓦合資会社が資金不足で解散した際に、松崎菊三郎が工場の財産を継承したことから始まる。当時、松崎菊三郎、原巖次郎、遠藤平兵衛、奥川丈一、青木安太郎、櫛田某、大竹某等七百圓を出資し、平硝子合資会社を設立したが利益が得られず、更に松本興三郎、西村堅助、坂井喜兵衛を出資者に加えたが結果的にはうまく行かず明治31年に会社を解散した。菊三郎の会社は業を維持したが、日露戦争後に事業熱が勃興すると石田勝徳、真木亀太郎、西村堅助、加藤政久、諸橋久太郎、鈴木友二等の同志を募り、資本金十萬円で磐城硝子株式会社を組織して、火舎、壇類、更には石笠を製造した。社長に松崎菊三郎が就任し、専務取締役に黒木房教がいる。

仙台市には佐藤易三郎、中村文六、佐藤胞衣治、佐藤栄治の四工場あり。製品は火舎及び壺類を主とし、その他 蠅取器、斤壘、共臺洋燈、湯呑といった商品の取り組みがあるがレベルが高いとは言えない。

北海道では札幌の大日本麦酒株式会社製壘工場が際立っている。本工場は元札幌麦酒株式会社が創設したもので、大阪麦酒會社と同じく最初は古壘の再利用を目的としていたが、供給不足になるに伴い、当時の専務取締役である植村澄三郎の意見により、また吉見幹之の設計により、明治33年に製壘工場を設けた。最初は半瓦斯式槽窯一基で年間16万本を製造したが、随時拡張して明治38年には槽窯二基を据付け年間280万本の生産に至る。明治39年に大阪麦酒、日本麦酒2社と合同して大日本麦酒株式会社になると、更に第二製壘工場を増設すると旧工場も含めてシーメンス式リゼネラチイブ槽窯を築造した。その後は200人以上の職工等が従事し、年間250万本を製造した。このような中で吉見幹之は大阪・吹田の製壘工場に転任し、また近藤政雄が吹田より転じて本工場の主任技師を務めた。

大筋このような状況であったが、需要、利便性等様々な要素から東京・大阪のウエイトが大きく、他の地域は、その特色を生かし将来的な展望を追求するという状況である。

#### 《解説》

「其他諸地方」としては先ずは名古屋地方が挙げられている。この地域には第三回のところで示した通り、「美濃」でガラス製造での大きな成功者となる石塚岩三郎の存在があり、後に名古屋地域に移り、事業を拡大して行くことになる。石塚岩三郎から継承されている石塚硝子株式会社が日本で最も古いガラスメーカーということになる。この会社はガラス壘の延長でガラス成型品のウエイトが多かったが、近年のプラスチック、紙材料を使った商品、ガラス材料に於いても新たな分野に手掛けるが、その材料に付加価値を加える等、様々な取組み手段があることが、世の中の変遷を見ると分かってくる。

明治時代の技術水準をPRする内国勸業博覧会は明治36年(1903)の第5回(大阪)開催で区切りがつけられている。直後の日露戦争(1904~1905)の時期に於いて世の中が変化する大きな分岐点となったのである。

2025.2.10 藤田卓 記

次回の**第十一回** 「(4)板硝子製造業」に続く